

# 対馬文化財通信

第9号



対馬市文化財保護審議会編

# 目 次

— 巻頭言 —

□ 平 豊春君殉職の碑 …………… 齋藤弘征 …… 1～2

□ 孝行芋伝来三〇〇年 ①

甘藷の歴史 …………… 小松勝助 …… 3～4

□ 柳川事件の悲しい被害者 …………… 早田和文 …… 5～6

～調興の妻宮姫の生涯～

□ 「御米漕船」の航海安全を祈願した金比羅神社

…………… 小島武博 …… 7～8

□ 野田市郷土博物館から考える博物館という場のあり方

…………… 高田あゆみ …… 9～10

□ 賀嶋恕軒と松浦桂川

…………… 小島克喜 …… 11～13

■ 文化財短信 (文化財課)

…………… 14

〔表紙題字〕 前対馬市教育委員会教育長 梅野正博 (うめのまさひろ)

〔表紙写真〕 「三根上里の盆踊り」

H28 文化財・景観写真コンテスト 対馬市長賞 須川英之 (すがわひでゆき)

―巻頭言―

平 豊春君殉職の碑

齋藤 弘 征

巖原町久田、旧久田幼稚園の側を通り久田小学校に通じる市道の傍らに、森木立に囲まれて人知れず寂然とたたずむ一棹の顕彰碑が建っている。碑の高さは、台座を含めると二百六十センチメートルほどの顕彰碑。幾星霜、春は新緑の香を纏い、夏は蝉時雨にあやされ、秋は錦繡の色彩に照り映え、そして冬は茶屋の台から吹き降ろす寒風に身じろぎもせず……。この碑を、しかし人々は殆んど知らない。私もかつてそうだった。

碑面には、「平 豊春君殉職之碑」とあり、揮毫者の名が左下に、「農林省経済厚生部長小平禮一書」とみえる。農林省経済厚生部長を以てして題字を揮毫された人物とはどのような人物だったのだろうか。背面に、「経済更生ノ□□ヲ帯ビ長崎□□ニテ□□途次昭和十一年四月三日□□□□頃長崎港外三重沖三□吉丸ト共ニ遭難□□」（碑面は風化が進み判読できない字も多い）と簡単な事歴が刻されているが、その史実は不明のままだった。

二〇〇〇年一月、長崎県立対馬歴史民俗資料館に届いた一

通の手紙によって、奇しくもこの史実が判明した。差出人は、長崎市三和町にお住まいの平喜十郎という方だった。何と、私が勤務した長崎市立土井の首小学校のすぐ側にある町である。文面によると、昭和初期に対馬の農業改良・普及指導で赴任した叔父の殉職碑が、久田という所にあるとのことなのでいつか親族で供養に行きたいと思つています。ついではその所在場所を教えていただきたいとのことだった。

しかし、その所在を館員の誰一人知らず、結局、休日を使って自分で探すことにした。が、久田域内を何度か探しても見つからず、もう半ば諦めかけていた頃日だった。

（でも、何とか見つけ出して平さん御一族を安心させてあげたい）

という思いに駆られて探索を続けた。

そんなある日、旧久田村役場近くを通りかかった時、目の前の茂みの中に、一棹の碑がぼつねんと建っている。短い冬の日が暮れようとする静寂の中に、その光景は不気味ですらあった。

（ん？、もしかして……）、と、近づいてみるとまさしく、「平……」という字が見えるではないか。

（これだ……）

幻の碑はこうしてこつ然と現れた。冬の寒い日だったことが記憶に残っている。

翌年、碑の存在を知った地域の方々が周辺整備をして下さ

り、見違えるようになった。碑を覆い隠しそうになっていた雑木は切り払われ、雑草は取り除かれたうえに、域内には砂利まで敷かれていた。少年の頃平さんの訓導を受けられたという小島素直氏のお話を聞いて、その人物像がおぼろげに浮かんできた。氏は久田村のみならず、広く農業改良・生活改善について熱心に指導されたという。またその明朗・篤実な人間性は一様に村民の敬愛を受けていたという。「自力更生」を標榜し子供たちにもこの言葉を折々に諭されたという。離島で、未発展の対馬の産業・文化に寄与したいという崇高な情念には心を打たれる。

平さんご遺族の御来島は結局叶わなかった。その後御病氣になられ念願は果たせぬまま他界された。が、親族で、事蹟は語り継がれていたようで、「身寄りは私がただ一人になりました」と、長崎市にお住まいの姪御さんと名乗られる池田フクノさんという方から一昨年九月に突然お手紙をいただいた。九十歳の高齢で、対馬まで供養に行けないのが残念ですとのことであった。志半ばで異郷に逝った親族を愛おしむ心温かさに胸を打たれた。お手紙には、

「墓前に埋めてください」

と、記されて故人の写真が数葉入れられていた。

身の周りに、人々の記憶から忘れ去られた歴史・文化財は眠っていないでしょうか。できるだけ広く顕彰したいもので

す。



路傍に建つ平豊春君殉職の碑。

どなたかカップ酒をお供えして下さっていた。

(さいとうひろゆき・対馬市文化財保護審議会 会長)

孝行芋伝来三〇〇年①

## 甘薯の歴史

小松 勝助

一、甘薯の原産地と世界への伝播<sup>でんぱ</sup>

### 【甘薯の原産地】

甘薯の原産地は、メキシコ南部を中心とする中々南米の北部とされています。その発祥の地に関する考古学的な資料としては、南米のペルーの遺跡があります。この遺跡からは、紀元前一〇〇〇年から一三〇〇年ごろ、甘薯の乾燥した根や葉、花をえがいた綿布、甘薯を題材にした土器がたくさん発見されました。

### 【世界への伝播①—三方向伝播説】

甘薯の世界各地への伝播について、ニュージールランドのエン博士 D.E.Yen は、一九七四年に、甘薯は原産地から次の三つのルートで世界に伝わっていったという「三方向伝播説」を提唱しました。

- 1 メキシコから島づたいにハワイ、グアムを経てフィリピンに達した。
  - 2 南米のペルーからイースター島、ニュージールランド、ハワイなどをへて、ニューギニアなどに達した。
  - 3 大航海時代(十五〜十七世紀)、ヨーロッパからアフリカやインドなどをへて東南アジアに達した。
- 3 のルートで、十五世紀に甘薯の発見と伝播に一役か

ったのは、大航海時代、地理上の発見に名をのこしたコロンブス(1451 ころ〜1506)をはじめ、ヴァスコ・ダ・ガマ(1469 ころ〜1524)、アメリカゴ・ベスブッチ(1451〜1512)、マゼラン(1480〜1521)、バスコ・ヌーニエス・デ・バルボア(1475〜1519)、その部下の一人で、後にインカ帝国の征服者として知られるフランシスコ・ピサロ(1470 頃〜1541) など、イタリアやスペイン、ポルトガルなど西ヨーロッパの探検家、冒険家、航海家たちでした。

### 【地理上の発見と甘薯】

一四九二年、甘薯はコロンブスがアメリカ新大陸を発見した時のみやげとして、その航海に惜しみない援助の手をさしのべたスペインのイサベル女王(イサベル一世、Isabel I、在位 1474〜1504)へ献上され、ヨーロッパに伝えられました。しかし、ヨーロッパでは甘薯はスペインでわずかに栽培されただけで、のちに伝わったジャガイモにおかれ、ほとんど普及しなかったといわれます。コロンブスがアメリカ大陸へ到着したことにより、ジャガイモやトウモロコシなどがヨーロッパにもたらされ、農業や人びとの食生活に大きな変化、恩恵を与えました。

### 【マゼランの世界一周】

コロンブスによるアメリカ大陸発見から三〇年後の一五二二年、ポルトガル人マゼランのひきいるスペイン艦隊は世界一周に成功し、地球が丸い球体であることを実証しました。世界一周の航路が開かれたのをきっかけに

ヨーロッパ諸国のアジアやアメリカ大陸への進出が始まり、さかんに商業や植民地活動がくりひろげられました。このような多彩な活動に乗じて、船乗りはもちろん、商人や宣教師、探検家などがつぎつぎと東アジアの国々をめざして航海に乗り出していきました。

【世界への伝播②—バルトロメウ・デュアズ】

一五二六年、ヨーロッパ人として初めて太平洋に到達したのはスペイン人のバルボアでしたが、ブラジルまで南下したところで現地人との争いに巻きこまれ殺されました。客死したバルボアに代わり、ピサロの探検隊のもう一艘の船長で水先案内をつとめたバルトロメウ・デュアズ(バーソロミュー・デュアズ、1450(？)ろく(1500)がさらに南下してペルーに到達すると大きな集落があつて、甘藷やトウモロコシ、ジャガイモなどの畑がひろがり、原住民による高い農耕文化社会が開けていました。こうして、メキシコ南部で発見された甘藷は、原産地からヨーロッパへつたえられました(バルトロメウ・デュアズルート)。

【世界への伝播③—ヨーロッパ人のアジア進出】

十六世紀から十七世紀にかけて、甘藷はオランダ、ポルトガル、イギリス、スペインなどヨーロッパ人のアジア進出にともない、探検家、船員、宣教師、商人たちによつてさまざまな経路をたどつて、ヨーロッパからインド、インドネシア、フィリピンなど東方へ伝えられ、次第に世界中に広がっていきました。

【中国への伝来：そして琉球国へ】

甘藷がフィリピンのルソンから中国へ伝えられたのは一五九四年(文禄三)のことです。それから三年後の一五九七年(慶長二)、宮古島(当時は琉球国)の村役人、長真ちようしん氏しや旨屋しゆりが首里王府への帰路に、漂着した中国より苗を持ち帰ったのが、日本へ伝来した最初の甘藷といえます。

(参考文献)

宮本常一『甘藷の歴史』(日本民衆史7)一九六二年、未来社  
中馬克己『日本甘藷栽培史』 二〇〇二年、高城書房

「こうこも祭」平成二十七年十一月二十二日(日)

対馬で初めて孝行芋栽培に成功した原田三郎右衛門を顕彰する「こうこも祭」が、伝来三〇〇年を記念し生まれ故郷、上県町久原の久原小中学校跡地で行なわれました。次は開催要項の一部です。

\*

「原田三郎右衛門 移植三〇〇年記念 こうこも祭」

- 1 主催 こうこも祭実行委員会(会長：小田俊輝)
  - 2 共催 旧久原小中学校区 (鹿見・久原・女連)
  - 3 後援 対馬市・松園尚巳記念財団
  - 4 献花 原田三郎右衛門顕彰碑への献花(諸家)
  - 5 斉唱「ふるさと」 峰町西小学校児童・地区住民
  - 6 記念講演「原田三郎右衛門の活躍」(講師：小松)
- (こまつかつすけ・対馬市文化財保護審議会委員)

## 柳川事件の悲しい被害者

↳ 調興の妻宮姫の生涯 ↳

早 田 和 文

仲間と共に対馬歴史民俗資料館で宗家文書を読んでいます。元公務員、元会社員、主婦等々十名ほどで、月二回集まり、和気藹々と楽しんでいます。

これまで色々な史料を読んできましたが、最近のものでは柳川実記がありますし、今進めているのが柳川調興公事記録「上」です。

柳川事件については田代和生著「書き替えられた国書」がコンパクトにまとめられ、読まれた方も多かろうと思います。江戸幕府を震撼させた「小説より奇」な一大国際事件の顛末と著書の表にも載っています。私も大変興味をもって読みました。

柳川氏はもともと出自もわからない低い身分の出でしたが、調興の祖父調信が宗家の重役にまでのしあがり、父の智永も家老職をつとめ、調興も当然に将来が約束されていました。義成の父義智と調興の祖父調信は秀吉の朝鮮出兵の苦しい時代を共に過ごし、乗り切って、君臣の間は緊密でしたが、時移り、義成と調興の間は微妙な関係となり、ほころびができてきました。

宗氏と柳川氏のいさかいは初めのうちこそ互いに相手を誹謗する、中傷合戦でしたが、調興は宗氏との主従関係を断ち、幕臣として生きたいと訴えるようになり、さらには調興が国書改ざんの爆弾発言をしたことから、単なるお家騒動から徳川將軍並びに日朝間の外交問題にかかわる、国際的かつ国家的な大事件に発展してしまいました。

寛永十二（一六三五）年三月十一日、江戸城本丸の大広間にて將軍家光臨席のもと、審理された判決は「死罪組」島川内匠（宗家の祐筆）・松尾七右衛門（柳川家の重臣）、「流罪組」玄方と宗智順（宗家の外交僧と重臣）・調興と玄昊（柳川本人とその外交僧）。

調興の津軽流罪に対し、義成には何らの咎めがなく勝訴の如くみえますが、義成にとっては日朝外交を推進するうえで、玄方を失ったことは大変な打撃でした。

田代先生の著述を参考に柳川事件の概略を述べましたが、私が原稿にまとめてみようと思いついたのは義成の妹で調興の妻になった宮姫の存在がとても気になったことからでした。

宮姫について詳しく書かれたものもないので、「宗家譜略」をあたってみました。「正保元甲申九月二日卒 徳松院二葬今少林庵ト改ム 徳松院殿心月妙雲大姉」

とあります。少林庵の場所はどこかと「厳原古地名地図」で調べると、以酌庵通りと対馬高校に上って行く道路とに挟まれたあたりにあります。道路拡張や住宅地化等で今は墓地らしき跡は確かめることはできませんでした。厳原にはあちこちに多くの廃寺がありますが少林庵も同様で、「増訂對馬島誌」によると臨濟宗であることがわかりました。

同じ宗派で近くの長寿院にでも移されたのではなからうかと思ひ、探しましたがとても一人ではできそうななか途中でやめました。同腹の姉妹三人も長寿院に葬られていますし、泉澄一著「対馬藩の研究」の中に、「元禄六年九月二日 徳松院様五十年忌長寿院、御宮様御事、御隠居様御伯母様也。御子様無也。」という記述もありますので長寿院とは縁も深いようです。どこかにあるのかないのか気にかかるところです。どなたか詳しい方に御教示いただきたいと思ひます。

「宗氏家譜略」にはまた「元和七辛酉春江戸へ越ス今年八歳」とあり、その通りであれば享年三十一歳となります。

八歳で江戸にいた調興のもとへ嫁ぎ、寛永三年、十三歳の時一件が起こり、寛永十二年、二十二歳で離縁され宗家へ帰った宮姫ですが一件以来、宗家と柳川氏の間は次第に険悪な雰囲気になり、宮姫にはけっして楽しい生

活ではなかったでしょう。

調興との間には子供もありませんでした。やがて両者の確執が避けられない状態となったとき、宮姫は一方的に離縁されます。兄の義成が將軍家光のお供で京都に行つて留守の間を見はからい、わずかな荷物とともに、江戸の対馬屋敷に送り届けられたのでした。

「毎日記」正保五年閏正月十四日の記事では阿須に住んでいたようですが、帰国後約六年、対馬の生活は宮姫にとつてはどんなものだったでしょうか。いわば逆心である調興の正妻であったのですから、対馬にもどつたのちも居心地の良いものではなかったでしょう。本当に薄倅の悲しい生涯だったなと痛切に思ひます。

(そうだかずふみ・対馬市文化財保護審議会委員)



## 「御米漕船」の航海安全を祈願した金毘羅神社

小島 武 博

大手橋の金毘羅神社は、巖原の東側標高三五mの山上に鎮座されている。安永三年（一七七四）天台の僧侶・慶坊が勧請した大宮権現を祀ると伝わっている。

当時は周辺まで海辺であり、そのすぐ丘に鎮座されていたと推定される。現在のようにつづくりが整備されると、本来の金毘羅神社のイメージは薄れているように思えるが、江戸時代、海運業の発展とともに、海運業者や商人が商売繁盛の拠り所としていたその精神は現在にも引き継がれ、周辺の住民奉仕によって、日々の生活の中に溶け込んでいることにとつとも変わりはないようだ。

その入り口の鳥居の前に、嘉永二年（一八四九）に「御米漕船」の安全航海を祈り築造奉獻したと記す石橋が残っている。古い時代から食糧事情に乏しくその確保に奔走してきた対馬藩が、江戸時代に朝鮮の釜山に設置された日朝貿易の拠点・倭館から買い入れた米を対馬まで運ぶ「御米漕船」の航海安全を祈願していた場所であつたらしく、今に残る橋の欄干は、江戸末期の嘉永年間に奉獻されたものである。

「御米漕船」とは、朝鮮国からお米を求めていた対馬藩が、倭館から対馬までを朝鮮米を積んで往來していた渡航船のこと、大体五百石から千石級の船であつた。一回の「御米

漕船」には、多いときは八百俵も積まれることもあつたが、普通は大体百俵から二〜三百俵程度、年間三十隻以上が朝鮮海峡を往來していたという。

運送は、特権商人六十人組が担い、藩の船ではなく、自分の持ち船でもって朝鮮海峡を往來していた。そのため、大事な米の運送を任された商人たちにとって、安全に航海し、対馬藩に滞りなく届けるということが責任重大な任務であり、海運の神様で伝わる金毘羅神社に安全祈願をすることは至極当然のことであつたらう。

因みに、宝永四年（一七〇七）に対馬からの釜山への「御米漕船」の入港数は合計五十二艘で、内「御米漕船」は四十八艘、対馬藩は月平均四回も朝鮮から二百〜三百俵の米を買って受けていた試算になる。

倭館貿易に依存していた対馬藩の石高の二割から三割は朝鮮からもたらされていた朝鮮米で、特に、天保十一年（一八四〇）までの朝鮮米は、対馬藩の米の四十七%を占めていたという。対馬藩の江戸屋敷経営用の米・肥前田代などの知行地の年貢米を除けば、対馬で消費された米のうち、七十%は朝鮮米であつた。

対馬藩儒であつた雨森芳洲が外交の手引書『交隣提醒』の中で、「もし朝鮮貿易が廃止されるようなことになると、対馬の人々にとって、嬰兒の乳を絶つことと同じである」と述べているが、まさに当を得た指摘であり、それが食糧に乏し

い対馬の実情だったのである。

金毘羅神社の拝殿は石段を登って、当時港から出向する船を見送ったであろう頂に、海を舞台とする対馬の人々の安全安心を守護した歴史を彷彿させるように、今でも変わることなく鎮座されている。

参考資料

田代和生著『近世日朝通交貿易の研究』  
長崎県教育委員会発行『長崎県と朝鮮半島』

(こじまたけひろ・対馬市文化財保護審議会 副会長)



奥が金比羅神社 社殿

## 野田市郷土博物館から考える博物館という場のあり方

高田 あゆみ

つしまミュージアム・プロモーターとして着任するまで、あまり博物館に行ったことがなかった。美術館やギャラリーは日常的に訪れていたが、博物館は私にとって「門戸を閉ざした」場所だった。美術館に展示されるものは感覚的に楽しめる一方、博物館に展示されるものは知識なしには楽しめないと考えていたのである。その印象は、博物館の視察に行くようになって一八〇度変わった。

しばらくすると、対馬での私の生活も三年目を迎える。数えてみれば、この二年ほどで、およそ五十の博物館や美術館に足を運んだようだ。博物館を訪れると、反射的に対馬を想像する。「〇〇を参考にしたら良さそう」や、「△△はどうすれば解決できるかな」、「対馬では××は難しいかも」などのように考えることが癖になってしまった。

さて、ここで、約五十館のうち、印象に残っている一つの博物館を紹介する。要点だけになってしまふことをご了承いただきたい。

特定非営利活動法人(NPO)が博物館を運営している事例である。千葉県にある野田市郷土博物館は、県内最初の登録博物館だ。しかし、学芸員の不足や、博物館のビジョンの喪失、それらに伴う事業縮小によって、機能不全の状態に陥っていた。ところが、その状態を五年間で回復させた。市民を中心に発足したNPOが指定管理者と

して博物館(と隣接する市民会館)の運営を引き受けることで、入館者数はV字回復し、利用者の満足度も上がったそうだ。

野田市は、市の政策において博物館の位置付けを見直し、担うべき役割を転換させることから始めた。そして直営から指定管理への移行を決め、人員や予算を確保したのである。NPOは政策に基づき、「野田発の文化発信」というミッションを次の三点に整理した。

- ① 地域の文化資源を掘り起こし、活用する博物館
- ② 人やコミュニティが集い交流する博物館
- ③ 人びとの生き方や成長を支援して、キャリアデザインをはかる博物館

さらに雇用や財源といった基盤を立て直したことで、博物館の活動は活発になった。特筆すべきは、博物館が地域の人にとって入りやすい施設になってきたことである。一年に複数回開催する企画展示は、市民とともに企画・運営をしている。ある一人の市民が生涯にわたり集めたコレクションを展示する「市民コレクション展」、学芸員が決めたテーマに対して市民が応募した資料を展示する「市民公募展」、自主的に活動している市民団体と学芸員が一緒に作り上げる「文化活動報告展」に分類される。例えば、「市民コレクション展」は、コレクションを地域の文化資源とみなすことができるだけでなく、コレクター本人が個人史を振り返る機会にもなっているという。博物館という公の場で自らのコレクションや資料、個人史を展示する機会は他にない。コレクション展を見て、自分も出品したいと言ってくる市民もいるとい

う。

博物館は、資料の収集・保管・展示・調査研究が基本的な役割である。加えて、観光や教育、また、コミュニティ形成といった付加価値を求められる館も多い。野田市では、地域の文化の発掘だけではなく、市民が自身と向き合う場としての役割を担っていると言える。それによって、四人いる学芸員には市民との意思疎通が求められ、また、業務の多くの時間を市民との交流に費やしているという。

対馬市が新しく作る博物館では、多様な役割を掲げた。地域の人々が何度も通い、研究者が満足し、観光客が必ず訪れる博物館が対馬市では求められている。野田市のように業務を限定することも一つの選択肢である。一方で、多様な役割を担えるように様々な個人・団体と連携することも考えられる。平成三十二年の博物館開館に向けて、建築や展示の設計だけではなく、運営のための基盤を設計していかなければならない。

野田市郷土博物館の経緯や考え方などについては、ほんの少ししか紹介できていない。さらに詳しい情報は、金山喜昭教授の『公立博物館を30に任せたら―市民・自治体・地域の連携―』を、現在の活動については、公式ホームページを参照していただければ幸いと思う。

(たかたあゆみ 島おこし協働隊 つしまミュージアム・プロモーター)



醤油醸造家の邸宅を市民会館として用い、その横に野田市郷土博物館は建つ。そのため、正門は、邸宅の門をそのまま利用している。野田の醤油産業の繁栄を見ることができる。

## 賀島恕軒と松浦桂川

小島 克喜

上意下達、君主絶対の江戸時代において、信念と正義感から惜しむらくも、その手腕を発揮することも叶わず、不遇の晩年を過ごした真の「さむらい」について記してみたい。

ひとりは賀島恕軒(かしまじょけん)である。正保二年(一六五四)に巖原府中に生まれ、父は二代藩主義成公の死に際し、殉死している。

恕軒は「巖正剛毅にして才幹有り」と早くから期待され、三十才の時当時対馬藩領であった田代(現在の佐賀県鳥栖市、基山町)代官所の佐役(副代官)を命ぜられる。島内の米の生産力が乏しい対馬にとって、石高一万石にも上るこの地はまさに藩の米蔵であった。

しかしながら、当時この地区は領民の困窮が甚だしく、借財に苦しむ者も少なくなかったと言われている。

恕軒は、領民に対し衣食住はもとより、借金の返済方法に至るまで事細かく指導し、親身になって生活再建を助けた。

また、洪水飢饉に際しては救米を施し、医薬を与えるなどして、多くの飢える者や病人を救済した。

その他、植林、植桑を勧め地区を豊かにすることに尽力した。

このように善政に努めた結果、領民も厚い信頼を寄せ、任期の三年が満了し帰藩することとなるが、領民から留まるよう懇願され続け、とうとう十年もの間この地で過ごすこととなった。

対馬に戻り大目付に任ぜられるが、領内の疲弊している様子

や、藩上層部の失政に耐えかね、三十四条にのぼる上書を提出した。国の将来を憂えての行動であったが、現政治を批判する内容も多く、為政者の怒りをかうこととなった。

決死の覚悟で己の意見を言上したのであるが、受け取る側の度量によつてはただの「藩政批判」となってしまう。結局藩主の怒りに触れ、佐護へ、その後伊奈(ともに上県町)に幽閉されることとなる。

流罪地においては、寒夜にも重ね着をせず、また、自ら食事も一食を減らした。そして村人に学問を教えるなど、あくまでも「清廉」且つ「憂国」の士であったと伝えられている。

一一年の流罪生活の後、元禄一〇年(一六九七)五三才でその生涯を閉じることとなる。藩主や藩重臣への遠慮から擁護する者は少なかったようであるが、それでも心ある人は彼を評価していた。

後年藩老等の進言もあつて、家名を再興されることとなるが、それは没後八十年経つてからのことである。

対馬ではあまり知られていないが、恕軒の死後、田代地区の領民は正規の年貢とは別に、毎年米百五十石を恕軒の祭祀料として藩に送っている。また、庄屋等の発起により、寛政六年(一七九四)に田代領内の太田山安生寺(鳥栖市)に顕彰碑が建立された。

このことから、如何に恕軒が田代地区の人達に慕われ、尊敬されていたかを覗い知ることができよう。

地元民により毎年祭典が行われ、今も四月九日に「賀島公祭」が開催され、対馬市も案内を頂いて参加している。

もうひとりには松浦桂川(まつうらけいせん)である。父は対馬藩の代表的な外交家であった雨森芳洲の二男龍岡(りゅうこう)で、日朝関係史研究の重要資料とされる「通交大紀」等を編纂した松浦霞沼に実子がなかったことから松浦家を継ぎ、通信使の護行、真文役として活躍していたが、朝鮮との貿易改善のため裁判役として朝鮮に渡った折、事情により使命が果たせなかったことから、閉門となり知行も没収される。

桂川は元文二年(一七三七)その龍岡の長子として生まれ、芳洲と霞沼という二人の偉大な祖父から薫陶を受けて成長する。

京都遊学の後、宝暦一二年(一七六二)藩主(九代義蕃・よししげ)後により(あり)に英明が届き、跡継ぎが無かった父の実家である雨森家を継ぐこととなり、真文役・朝鮮方出仕を命ぜられる。

ちなみに、京都で過ごした折、桂川(かつらがわ)の水で心を洗うとの意味から桂川(けいせん)と号したと伝えられている。

一旦雨森家を出て松浦家を継いだものの、今度は雨森家の継承危機に際し、弟蘭洲が家督相続を認められるまで雨森家を継いだ後、松浦家を再興している。なんともめまぐるしい人生である。

対馬の財政好転策として、朝鮮からの輸入米を現状の一万六千石から二万六千石に増やすこと、幕府に交渉して国防の費用として八万両支出させること、土地を開いて農桑(養蚕)を発展させて石高を増やすこと等の建議をするなど、藩主の信任も厚く、明和八年(一七七二)家老に任じられている。

この頃、義蕃公は藩主の座を甥の義暢(よしなが)に譲ってい

たが、なお藩政の実権を握っていて、次第に実子である氏江兵庫(うじえひょうご)を藩主にしたいと念じるようになる。そして、そのための対外工作を桂川に命じたのである。

清廉で高潔な性格であった桂川にとっては、あまりにも理不尽と思えるこの命に、諾々と従うことは到底不可能であった。

さりとしてこの密命に背くことは、この先自らの運命を大きく左右するばかりでなく、家族・親戚の行く末にまで影響を及ぼすことをも意味していた。悩んだ果てに、彼は過酷な決断をすることになる。

なんと、幕府に対し義蕃公の意向に反した内容を陳述してしまう。当然義蕃公は激怒、江戸から対馬に呼び戻される。藩主義暢への累禍を案じ本人も自害を望み、義蕃公も殺そうとするが、京都から派遣されていた以酌庵の僧からの助命嘆願もあって、罪を減ぜられ中原(上対馬町)に、その後中來栖(上県町)に幽閉されることとなる。(桂川三八才)

江戸から護送されて帰る際に、警備の者から短刀に添えて果物の差し入れがある。その短刀で自害しようと考えているが、それにより警備の者が責任を問われ、職を失うことに思いが至って、自害を思いとどまったと言う逸話も残っている。

幽閉中も近隣の子弟に勉学を教え、在村が火災で被災した折りは、救援金を集めるために、獄中から力を尽くすなどといった行動が藩中枢にも聞こえ、加えて長年以酌庵の僧からの赦免要望も続けられていたこともあって、「牢居」から「流罪」に減刑される。

大変な母親思いとしても知られ、弟が面倒を見ていた母親が

危篤と知り、許しを得て看病を尽くす。その折、藩老が朝鮮通信使来聘の件で意見を聞かため、自宅に招きたいと申し出たが、流人の身であり招いた側に害が及ぶことを心配して断っている。母の死を看取り、喪を終えて中来栖へ帰る途中、仁田において寛政四年（一七九二）五六才で病没する。亡骸を府中へ送ろうとするが、悪天候により船を出すことが出来ず、中来栖に葬られることになった。

いつの時代も権力におもねり栄達を極める者、あるいは「何を言っても変わらない」というあきらめや、事なかれ主義から、「沈黙は金」を決め込む者が多い中、怒軒や桂川の取った行動はいかにも不器用な生き方と言えるであろう。

不本意ながら、親族に災いが及ぶことも心配しながらも、時節を憂い、信念に基づき決断せざるを得なかった心情を思うと同情の念を禁じ得ない。

いずれも藩主、上司に恵まれていれば、おそらく相当の手腕を発揮し、対馬の歴史に違った形で名を残したであろうことは想像に難くない。

土中の二人は、今の世の中をどう思っているであろうか。

引用した文献

- ・対馬叢書第四集 郷土資料対馬人物志  
（長崎県教育会对馬部会編）
- ・松浦桂川書簡抄 （松浦京子）
- ・上県町誌 平成一六年二月発行
- ・厳原町誌 平成九年三月発行

（こじまかつき 対馬市教育委員会文化財課長）



賀島<sup>たつきよ</sup>怒軒<sup>たつきよ</sup>謫居<sup>たつきよ</sup>焉の地記念碑  
（上県町 伊奈）



松浦桂川の墓  
（上県町 瀬田）

## 文化財短信

### ■金田城築造1,350年

文化財の種類として、遺跡や貝塚、古墳、城跡などは「史跡」として分類されています。その史跡の中で特に重要なものは国から「特別史跡」として指定されます。

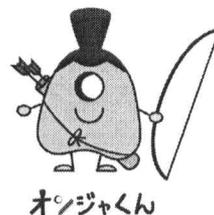
特別史跡は全国に61、長崎県内では杵岐の原の辻と金田城跡だけが指定を受けています。

金田城跡は、美津島町の黒瀬地区と箕形地区にまたがる標高272mの城山に築かれ、白村江の戦後西国防衛の最北端に築かれた重要性と、遺構の良好な遺存状況から、昭和



東南の角石塁と黒瀬湾

57年3月に特別史跡として指定を受けて以来、国・県の補助を受け保存整備を進めてきましたが、平成30年度をもって第1期の整備事業を終了します。勿論それで整備が完了したということではなく、その後についても新たな整備を計画し実施していく予定です。



金田城は天智天皇の時代西暦667年、唐・新羅の来襲への備えとして築造されました、来年は築造から1,350年の記念すべき年になることから、市内外からたくさんの方に来ていただけるよう、それに因んだイベントを計画したいと思っています。

金田城で警護にあっていた「防人（さきもり）」と、金田城から出土した「温（おん）石（じゃく）」をモチーフにした「オンジャくん」。

### 対馬文化財通信第9号

発行日 平成29年（2017）2月28日

編集 対馬市文化財保護審議会

発行者 対馬市教育委員会文化財課

長崎県対馬市美津島町雞知甲1287番地1

TEL0920-54-2341

FAX0920-54-4046

